

ビキニ被災支援 室戸の会

ニュース 2024年2月10日 No.56

発行 ビキニ被災を支援する室戸の会 太平洋核被災支援センター
連絡先 事務局 宿毛市 088-066-1763(山下) 室戸の会 0887-35-8725(濱田)



ビキニ事件 70 年 マーシャルの 3.1 記念式典に行ってきます

中部太平洋のビキニ環礁で水爆実験が行われたのが 1954(S29)年3月1日です。今年は、その年から 70 年の区切りの年になります。あちこちで記念行事も行われるようですが、ビキニ環礁のあるマーシャル諸島共和国でも 3 月1日にその記念行事が行われます。

マーシャルは 1956 年から 1958 年まで 67 回も核実験が行われています。直接的に実験が行われたこともあり、被害は深刻なものがあります。ビキニ環礁には放射能の汚染でいまだ人は住むことができていません。

昨年の5月に行われた「ビキニデー in 高知」にはマーシャルのエベレンさんという方が来てくれました。小笠原さんと交流も感動的でした。今年のマーシャルの記念行事には高知からも参加しようということで、下本節子さん(元船員の遺族)と笹島康人さん(元高知新聞記者)と濱田(ビキニ被災室戸の会)の3人が参加します。

◆「世界中から核兵器の廃絶と被爆者の救済を一日も早く」

※下本節子さんの式典での発言の準備原稿です。付け加えがあれば連絡してください。

日本から来ました下本節子です。私の父親は 70 年前、高知県のマグロ漁船第七大丸で働いていました。当時、太平洋ではたくさんの日本の漁船が魚を追って漁をしていました。1954 年の核実験では第五福竜丸以外に約 1000 隻の船が被災していたのです。でも、漁船員たちは黙っていました。被ばくしていることを知らされなかったり知っていても口止めされたり、漁業への不利益や、仕事や子どもへの差別を心配して隠していました。私の父も黙っていましたが、1960 年 36 才の時、病気で船の仕事をやめました。そして 60 才の時胃癌で胃の 3/4 を摘出手術

しました。亡くなったのは 2002 年、78 才、胆管癌でした。

核実験による漁船員の被ばくがあきらかになったのは、1985 年「幡多ゼミナール」の高校生たちが、平和の学習で地元の人たちの話を聞いている時長崎と太平洋で二度被ばくして病気になり、心を病んで自殺した青年のことを知ったのが始まりです。高校生たちが高知県の漁村を訪ねて調査を続け、沢山の漁船員が被ばくしていたことがあきらかになりました。私の父親もその中の一人でした。

当時の高知の漁船員たちは、漁をしながら小さな船の中で 2 ヶ月ほど暮らします。放射性降下物で汚

染された雨で体を洗い、汚染された海の水で米を洗い、汚染された魚や魚の内臓を食べるといふ船の暮らしの中で放射性物質が体の中に入り内部被ばくしました。内部被ばくは、人によって発症する時期や症状に個人差があります。何年かたって白血病や癌になってもその原因を証明することは困難です。でも沢山の漁船員が、被ばくが原因としか考えられない病気で若くして亡くなっています。国賠訴訟の原告団長だった増本和馬さんは次から次へといろんな病気になるのが不思議だったそうですが、10代の時働いていた漁船で、捕った魚を捨てた事を思い出し、被ばくしていたことが原因だったと納得したそうです。

増本さんは高等裁判の判決が出る1週間前に胆管癌で亡くなりました。私達は裁判をしています、延1000隻の漁船員たちの多くは、調査も救済も補償もされず、放置されたまま亡くなっていきました。このような被害を与えた国は、責任を取り、被害者を救済するべきです。黙っていると、なかったことにされてしまいます。

私が父の労災申請や国賠訴訟に加わったのは2016年です。その5年前の2011年3月11日に福島で津波による原発事故が発生しました。放射能の危険を知っている人はそれがどれだけ危険なことか心配したはずですが、しかしTVのニュースでは、「直ちに影響はない。」とか「笑っている人には放射能はこない」等とても科学的とは思えないようなことを、科学者らしき人が繰り返していました。私は放射能の矮小化に危険を感じて、被ばくの怖さをもっともっと知らさないといけないと思いました。それで、裁判にも加わることにしました。

また私たちはこのような非人道的な核兵器は廃絶されるべきだと思います。2017年核禁条約が国連で採択された時、私は当然のことだと思いました。でも、被爆国日本は今も核禁条約に参加していません。マーシャル諸島共和国も核禁条約に参加していないと聞きました。アメリカから日本に移住していた私の友人が一昨年50才で亡くなりました。筋肉の

癌でした。彼の出身はネバダの風下州・アリゾナです。両親とものがんで亡くなっています。核実験を行ったアメリカ国内でも、核施設周辺の住民や核実験で被ばくした人、戦地で被ばくした兵士たちが健康被害を訴えています。劣化ウラン弾も同じく危険です。放射線は成長期の子供達が一番被害を受けます。特に内部被ばくは細胞のすぐ近くで放射性物質が放射線を出し続けるので遺伝子が傷ついてしまうのです。

マーシャルでは67回、大気圏内で502回、世界中で2000回以上もの核実験が行われています。もうすでに地球規模で汚染されているといっても過言ではないはずです。核開発・保有・使用・威嚇・援助をすべて禁止する核禁条約にすべての国が参加して欲しいです。それに、核禁条約は、被害者支援と環境の回復を義務付けた初めての条約です。被害者はもう70年も苦しんでいます。核禁条約への参加で、核廃絶、被害者への救済と補償を早く進めていただきたいと思います。

高知では、今日3月1日「ビキニの海のねがい」という絵本が発売されます。数年前、元学校の教員だった人たちが、紙芝居を作り小学校などで子供たちに見せて読んでいました。この紙芝居を、絵本にしたのです。英語の訳も書かれています。世界中の子供たちに、被ばくの出来事を伝えたいという思いがこもった絵本です。

私は今回こちらに来ることになって初めてマーシャル諸島共和国のことを調べました。何も知らなかったことを申し訳ないと思います。こちらに滞在するのはわずか2日間です。でもこれをきっかけにマーシャルの人たちと繋がりが持てることを願っています。



「サイレント・フォールアウト」 室戸上映会にて

2023年12月17日に室戸の「やすらぎ」で「サイレントフォールアウト」(伊藤英朗監督)の上映会がありました。会場には、「室戸健康大学」の方も多く参加され、全体で約150人でした。映画は、アメリカのネバダでの繰り返される核実験を紹介し、アメリカ全土に汚染が広がっていることを紹介します。実は核兵器の製造もしているわけで世界一の核被爆国と言えるのではないかと思います。そして、そのことにアメリカ人は気が付いていないというところが怖いと思いました。原爆実験の見学ツアーもあるとは、驚きです。その中で、疑問を抱いた人たちがいて、子どもの乳歯を集め、分析する取り組みが紹介されています。

後半には、けた違いに大きかったビキニでの水爆実験「ブラボー」のことが紹介され、それは地球規模で汚染が広がり、室戸の鮪船も被ばくしているということが紹介されています。

元船員さんは「アメリカの汚染がここまでとは思わなかった。全土がそうだったのか」「アメリカは広島や長崎で実験をやって大きな被害を出している。どうし

てさらにやりたいのだろうか。やっぱり一番になりたいのやろか」など、感想を言われていました。

◆映画会、講演後フロアからいくつか発言がありました。紹介します。

○元船員です。次から次に癌が出て来て、そのたびに手術をした。スト論地有無はカルシウムに似ているので体に入ると骨にくっつくと聞いた。ビキニの時には遠くで操業していたが、その後も核実験は続けられて、私らはその中で操業していた。こういうことがあったということを知っていてほしい。

○20年前と一緒に調査したことがある。父も兄もマグロ船に乗っていた。室戸で何ができるのだろうか。

○父がマグロ船の漁船員をしていました。私はビキニ前後に生まれました。ある日テレビで「みさき丸」が出ているのを見た。父の名前も出ていた。ショックだった。父は背中が剥げていました。また、喉頭がんになっていました。私も甲状腺を患っています。

父は光も見た、船に砂がのっていたと言っていました。船員は口止めされ、黙ったのです。政府が認めていないのがおかしい。

「室戸岬船員同志会」<その2>

『すべての運動を平和な漁業を守る道に結集しよう』

この表題のスローガンは、室戸岬船員同志会(以下「同志会」)の発行する月刊誌「遠洋」の表紙に常に記されています。同志会の取り組んでいたものは賃金の問題、海難防止の問題など多岐にわたっていますが、平和の問題はととも重視して取り組んでいたことが、このスローガンにも見て取ることができます。1954年のビキニ水爆実験以降太平洋上でのアメリカによる核実験は繰り返されており、そのことは漁業者としては最重要課題だったのでしょう。

1957年におこなわれた第3回原水爆禁止世界大会で同志会の中谷会長が挨拶をして「万雷の拍手」を受けたことが記されていますので紹介しましょう。

「中谷会長は漁民代表として、またビキ



入港したところで散髪
※明神勇太郎氏提供

ニ水爆実験の久保山愛吉氏の代理として、漁場を失った全漁民の立場から次のように全世界に強く訴え、万雷の拍手を浴びた。

“世界の原水爆保有国に対して私は漁民代表として強く怒りを込めて訴えたい。我々の仲間は太平洋実験の最中でも生きるために恐るべき汚染の海に入っ
て操業してきました。また今度の英国クリスマス島における実験にも、私たち漁民は最後まで強く反対を叫んだ。しかし、英国は私たちの世論を無視して実験を強行した。・・・私は近所のおばあさんから、華やかな言葉や決議よりも、今すぐ実験を止めさせる方法を決めてきてくださいと言われてきた。私は世界の強い反対運動を期待して今後も原水爆実験反対の運動を進めていきたい。われらの悲しみは人類の物に!”
(「遠洋」No.34 1957年8・9月号 下線濱田)

1957年の2月～5月にかけて、クリスマス島の水爆実験に反対する運動が大きく展開されていたのです。このことは次回以降に紹介したいと思います。1957年、アメリカはネバダで実験を行い、1958年は再びマーシャルのエニウェトク環礁で核実験を行うと通告しました。そのことに対し同志会は書記部として全組合員にどのように取り組むべきかと次のように呼びかけています。

「マーシャル群島における水爆実験阻止の運動をどう進めるか」アメリカは来春、マーシャル群島のエニウェトク環礁で原水爆の実験をするとの報道が流れています。エニウェトク環礁は私ども70t～100t型の漁船にとっては、かけがえのない漁場であり、ここで実験をやられることは、私どもの生活そのものを根本から破壊することになります。私どもは過去いくつか原水爆の実験禁止のための運動を行い、今なお続けていますが、そのたびに大きな成果を上げてきました。

一、ビキニの時は、原水爆実験禁止運動を、それまでは日本国内のしかも狭い状態から、一躍全日本国民の運動へと高め、政府をも動かさせただけでなく、世

界の隅々から指示され関心を集め、国際的な運動へと口火を切った。

二、クリスマス島の時は、ついに世界の人々を原水爆実験を阻止するための直接行動へ発展させ、国際連合で実験禁止協定についての国際会議を開かせるまでにした。

したがって、今度のマーシャル群島での実験計画は今までの経験が示す通り、一人一人の船員が前よりもっとかたまって、今までの力をもっと大きくするならば必ず阻止できます。・・・具体的にどんな運動をしたら良いかを考え、みんなで検討して書記部に出してください。」(「遠洋」No.35 1957年10月11月号 下線濱田)

アメリカは1958年に「ハードタック第1章作戦」と称してエニウェトク環礁で22回、ビキニ環礁では10回、合計32回もの核実験を行っているのです。室戸の船、100tまでの小さなマグロ船は32回もの核実験の行われているその近くで操業を重ねていたのです。このころサモアに船団を組んで行っていたある元船員は、「マーシャルの危険区域をかすめて通っていたら、アメリカ軍の飛行機に早くそこから出るように警告された」と証言していました。

翌年1958年11月号では同志会の2名の副会長安田善助と今井直重の名前で「原水爆禁止運動を強化せよ」と訴えを出しています。今井直重さんは2019年にインタビューさせてもらいました。開口一番「同志会について話とうてたまらん」と言われたのが印象的でした。そして「ビキニの時には抗議船団を組んでビキニ環礁まで行って抗議しようと提案したら、家族会から大反対を受けた。しかし、こういう発想を持っていたのは同志会だけではないだろうか。」と笑いながら話して下さった。(濱田郁夫)

■今年**はビキニ70年の節目の年**です。マーシャルでは3月1日に記念行事が行われます。日本原水協とともに、高知から3名が参加します。

